

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2014年1月10日（金）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：明治前期の日本人と上海の文人達——北条鷗所を中心に——

報告者：王 宝平（中国浙江工商大学日本語言文化学院長，京都大学人文科学研究
所招聘教授）



一、鷗所はどんな人だったか

北条鷗所（1866～1905）は明治時代の漢詩人，官吏。名は直方，号は鷗所。江戸に生まれ，幼にして漢学を島田篁村に，詩文を森春濤に学ぶ。長じて東京外国語学校（現，東京外大）で颯川重寛に中国語を教わる。

1886年，在中国日本公使塩田三郎の知己を得て，20歳の際に一年余り上海へ来遊し，在地の文化人と積極的な交流を行った。帰国後，宮城控訴院書記，仙台高等裁判所書記長，大審院（のちの最高裁判所）書記課長を務めたが，1905年に肺病に罹り突然死去。40歳の人生の盛りであった。

鷗所は中国留学の前に漢詩を発表して，有名な漢詩人であったが，留学後は裁判所で働きながら，ますますその名を馳せるようになり，北京駐在外交官井上陳政（1862～1900）や上海総領事館総領事小田切万寿之助（1868～1934）と肩を並べて，中国通の三才と称えられるほどであった。

しかし，今日，北条鷗所といえば，知っている人はあまりいるまい。文学界でも彼に関する研究が皆無に近い現状で，鷗所は「忘却」される存在となっているようである。幸いに神田喜一郎氏が『日本填詞史話』（二玄社，1965）や『明治漢詩文集』（筑

摩書房，1983）に北条鷗所の項目を設けているおかげで，彼の事蹟をいくばくか知ることができる。

二、鷗所はなぜ中国に来遊したか

1871年に締結された中日修好条規に基づき，1872年に在上海日本領事館が開設され，そして，1875年に三菱汽船が上海・横浜間の定期便を開設した。それにより，竹添進一郎（明治9年），山本憲（明治12年），岡千仞（明治17年）等の文化人が中国に来遊したほか，莊田胆齋，佐瀬得所のような書家や村田香谷，長井雲坪，大倉謹吾のような画家も続々来航するようになった。いずれも20代，30代の書画家で，腕を磨き見聞を広げるために憧れの中国へ来遊した文化人である。鷗所もその中の一人である。

三、鷗所は上海で何をしたか

まず、『毎日新聞』兼任特別通信員として現地の情報を国内に提供したこと，そして，江馬聖欽，神山鳳陽，頼支峯，谷鉄臣等の漢文学者を中国に紹介したこと，が挙げられる。

鷗所が上海で行った活動は何と言っても現地の文化人との詩文交流であろう。（詳細は後述。）

四、鷗所が『申報』に残した漢詩

鷗所は1886年（明治19年）9月7日から1887年（明治20年）7月1日にかけて，『申報』に発表した漢詩は55点に上り，そのうち，詩47点，詞8点である。漢詩の多数は日本に存しない。神田喜一郎氏は上海に赴いた鷗所が填詞の筆を絶っているというが，実際「一絡索」，「一痕沙」（4首），「酒泉子」，「南歌子」，「漁家傲」，「醉落魄」，「相見飲」と計10首の詞を発表していることがわかった。

五、鷗所は如何なる人と交わったか

鷗所が交際をした人は43人に上り，1. 王韜や葉慶頤のような訪日体験者，2. 何桂笙，黄式権のようなマスコミ関係者，3. 新興山農等の他の知識人，4. 陸斐卿，陸小青，王佩蘭等の花柳界の人，5. 岸田吟香，井上陳政のような中国滞在中の日本人，と5つのグループに分けられる。要するに有名な人もいれば，名を知らない人も多

い。

中国人の中で、特に『申報』3代目の総主筆（総編集長）を務める何桂笙（1841～1894）との親交が厚い。鷗所が25歳年上の彼に22首の漢詩を『申報』に発表している。一方、何桂笙は「海天三友図記」（『申報』1887年4月1日）で1600余字の長文を撰し、鷗所、岸田吟香との友情、そして、当時として珍しい記念写真を撮影した経緯を詳述している。それが一時の美談となって、1887年4月から8月にかけて、祝賀の詩17首が贈られてきて、5ヶ月に亘って『申報』の紙面を賑わせていた。

また、鷗所が帰国の際に何桂笙が送別の文章（『申報』1887年7月1日）を書いているが、これもまた1500字に達する長文で、鷗所との交誼を振返って、鷗所に対するよき印象、赴任後の希望を述べている。最後に中日が連携してロシアの進入に備えるべく、と一体感を訴えている。

六、まとめ

鷗所が中国で発表した詩の大半は日本に存在していないため、鷗所のみならず、明治文壇や明治前期の中日学術交流を知るうえで、貴重な資料となるであろう。

そして、鷗所は1年余りの滞在中、計96回、月平均8回ほど『申報』に登場している。そのおかげで、上海の文人に広く知られ、中国人の日本人観の形成に影響を与えたのであろう。

鷗所は当時まだ若かったが、その学問にしても、人となりにしても在地の文化人に高く評価されている。その鷗所に対する好印象は日本人に対する好印象につながり、唐代に來訪した阿倍仲麻呂や宋代に來訪した裔然と同じように、明治前期の中国の日本人観の形成にプラスの役割を果たしたのであろう。

鷗所が訪中したころは、ちょうど明治前期の中日関係の過渡期に当たり、中日の文化人が相互に往来し、中国伝統文化を中心にした文化交流が盛んに行われた。鷗所は偶然にもその空前絶後とも言える文化交流の掉尾を飾る役割を果たした。

（文責：王 宝平，蔡 毅）